

北天奴隸

美柚子の 成長記録

斐芝嘉和

表紙イラスト：秋月からす

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『牝犬奴隸美柚子の成長記録 前編』
『牝犬奴隸美柚子の成長記録 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



牝 犬 奴 隷

美柚子の 成長記録

斐芝嘉和
表紙／秋月からす

登場人物紹介

Characters

ふじさわ みゆ こ
藤沢美柚子

世界的な大企業の令嬢で、品行方正、容姿端麗、学業優秀と非の打ちどころの無い美少女。漆黒のストレートロングの髪と新雪のような美白の肌が周囲の目を惹きつけてやまない。

は やま やす けい
葉山康幸

歪んだ性癖を持った平凡な学生男子。密かに憧れつつも近寄りがたい存在として敬遠していた美柚子を手に入れ、あれこれと画策する。

前世紀末から顕在化し始めた世界的な男女出生率の不均衡化は、十年ほど前にとうとう一对二十を超え、いまもなおその差は開き続けている。増えすぎた女性の価値は当然のように暴落し、余剰女性を奴隷化するのが現在のグローバルスタンダードだ。

——んで。

いま、僕の目の前には憧れの美少女・藤沢美柚子が立っている。

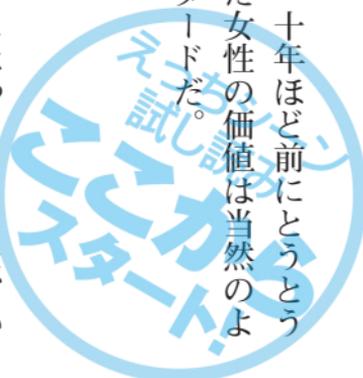
学年一の優等生で学園一の美少女、美柚子。

長く艶やかな漆黒のストレートヘアがとても綺麗な、妖精のようにほっそりとした、いかにも儂げな美少女だ。俯き加減の柔らかな頬が湯あたりしたように紅いのは、服を一切着ていないから。

身につけている物といえば細いうなじを飾る紅革の首輪と、手首足首に巻かれた鋼鉄製の枷だけ。片手でもすっぽり隠せてしまいそうな微乳も、その先端を彩る桃色乳首も、ほどよく括れたウエストも、プリッと丸く小さな美尻も、一筋の毛も生えていないツルンツルンのアソコも——蛍光灯の明かりを受けて眩しいくらいに瑞々しく輝いている。

世に生まれ出た女性の九割弱が奴隷になるという現在、女性の裸なんて別に珍しくもないが、しかしこの美しさは珍しい。透き通るような白い柔肌と漆黒の黒髪が織り成す鮮やかなコントラスト、羞じらって俯いた顔を彩る儂げな陰翳——。

「くうう……ッ！ いやもうなんていうか、綺麗だよ、美柚子ッ！ ほら、見て見て！



裸の美柚子を見ていたら、僕のオチンチンがこんなにおつきくなっちゃった！」

ベルトを弛め、ギチギチに勃起したペニスを引つ張り出す僕。

一瞬目を丸くした美柚子は慌てて目を逸らし、細い眉を不快そうに歪めて紅い唇を囁んだ。白い肩を震わせ、腰の両脇で小さな拳を握り締め——それでもなお頑なに、キヲツケの姿勢を崩さない。

美柚子は奴隷で、僕が御主人様だからだ。

御主人様である僕が「キヲツケ」を命じたから、奴隷である美柚子は健気にキヲツケしているのだ。

奴隷は御主人様に絶対服従が基本。なにしろ、掃いて捨てるほどいるのだ。法的には一応「性欲処理用愛玩動物」という位置づけだが、動物愛護法にわざわざ例外規定が設けられ、奴隷の生死と奪権は飼い主に与えられている。要するに、飼い主である僕は文字通り、所有物である美柚子を焼くなり煮るなり好きにしているわけだ。

——いやまあ、本当の御主人様は金を払った僕の親父なんだけど、親父は巨乳好きだから微乳の美柚子に興味なし。「高かったんだから長持ちさせろよ」と言っただけで、視姦すらしなかった。

なので美柚子は僕のものだ。

僕だけの性欲処理用愛玩動物だ！

「ほらほら、見てよ、僕のオチンチン！ カッチンカッチンになつてるよ！ これは美柚子のせいなんだ、だから見てよ……見る、美柚子！」

命令口調で言い直すと、美柚子はいまにも泣き出しそうな顔をおずおずと戻した。逃げたそうに揺れる瞳をそそり勃つ僕の淫棒へなんとか据えようと怯える心を叱咤しているのか、素足で絨毯を踏むスマートな脚線美がもじもじそわそわし始める。

そう、これが美柚子だ。

これでこそ美柚子だ。

大人しく控え目で雪の結晶のように儂げなのに、意外なほど芯の強い頑張り屋。大会社の社長令嬢とか学年一の優等生とかいうハイソな属性だけでも気後れするには十分なのに、真面目すぎて頑固な一面があるから、僕ら男子は憧れながらも敬遠し、オナネタにすることはあつても決して彼女にしたいとは思わなかった。

そんな美柚子が、いま——僕の目の前で裸になつて、頬を赤らめながら立っている。奴隷という恥辱の境遇を受忍して、御主人様の命令にちゃんと従おうと頑張っている。「本物のオチンチンを見るのは初めて？ 感想は？」

「……」

「答えろ、美柚子！」

「……き、気持ち、悪い……です……」

震える声を絞り出し、それでもなお、目は離さない。

眉を逆立て、睨むような目つきになって、僕の亀頭をまっすぐ見下ろす細身の美少女。いまにも泣き崩れそうなのに、柔らかな足裏で絨毯を踏んで一生懸命立っている。私はもう奴隷なのだから、御主人様の命令に必ず従わなければならぬ——と、己に言い聞かせているのだろう。

真面目で頑固な頑張り屋。

はつきり言って彼女にはしたくないタイプだけれど、虐めて遊ぶにはうってつけだ。

「気持ち悪い、か。正直だなあ、美柚子は」

苦笑した僕は、乳白色に輝く微乳や小さく可憐な桃色乳首をジロジロ見ながら、震える裸の美少女の背後へゆっくりと回り込んだ。

漆黒のストレートヘアは、白く薄く細い背中の中半ばくらいまで。尻はまだまだ小さいものの、スラリと伸びやかな太股と相まって、実に優美なうしろ姿だ。

「——オスワリ！」

「え？ あ……」

背後からかけられた短い言葉が自分への命令だとおくれればせながらに気づいた美柚子が、慌てて膝を折ってその場に正座。

——しなやかな背筋がピンと伸びた、実に端正な正座だ。細い顎を引き、怯えた顔をや

や伏せて、両手は瑞々しい太股の上にソツと乗せられている。

正座としてはパーフェクト、お手本として礼法の教科書に載せたいくらいの美しさではあるけれど。

「違う違う。脚を外に開いて、お尻を床につけて」

優等生美少女の意外な呑み込みの悪さに少々苛つきながら、僕は正しいオスワリの仕方を指示する。

奴隷の生死与奪権すら握っている飼い主は、自らが所有している奴隷をどのように扱っても構わないのだけれど、たいていは犬のように扱う。奴隷の蔑称として牝犬とか仔犬とかがよく用いられるのはそのためだ。

だから、奴隷である美柚子にとっての正しいオスワリは、仔犬としてのオスワリ。正座の状態から足先を外に向けて開き、お尻を床にペタンとつけた、いわゆるアヒル座りに。プラスして――。

「開き気味にした膝の間に両手を突くんのだ。腕はまっすぐ伸ばして」

犬らしい四つん這いにすぐ遷れるよう、腕の置き方にも注文をつける。

「……こ、こう?」

「いや、もっと背を反らして。顔を仰向けて……もつともつと背を反らせろ! 仔犬を見たことないのか? お前ん家でも飼ってただろう!」

なかなか犬っぽいオスワリにならない美少女を背後から叱りつけると、美柚子は長い黒髪を揺らし、小さな頭を左右に振った。

「飼ってなんてなかったわ。お父様は会社を大きくするのに精一杯で……資産家の義務として奴隷は数匹養っていたけど法定数だけだったし、ちゃんと服を着せてたし、メイド待遇だったし……」

「おいおい、藤沢製薬って言ったら世界的な大会社だろ？ 法定数はあくまで下限なんだから、それ以上に飼ってなきやダメだろう」

「……外からは裕福そうに見えたかもしれないけど、うちにはそんな余裕、全然なかったのよ！ だから薬害訴訟に一回敗れただけで破産してしまったのよ！」

涙声で叫んだ裸の美柚子が、急に両手で顔を覆い、シクシクシク泣き始めた。もう奴隷なのだから、と懸命に張っていた気持ちが、不意に切れてしまったのだろう。

世界中でバカ売れしていた主力製品に重大な副作用が判明し、あちらこちらから同時多発的に薬害訴訟を起こされたのが半年前。それに敗れて賠償命令が下され、藤沢製薬が破産したのが一カ月前。会社の規模は大きかったが成長途上の新興企業だったため、内部留保が足りなかったのだ。

遣り手の若手社長と持て囃されていた美柚子の父親は公判中に鬱病に罹り、賠償命令が下ったのち早々に自殺。残された美柚子と母親は賠償費用の足しにと奴隷に墮され、競売

にかけられた——いままでは別に変だと思わなかったけれど、なるほど、社長があつさり死んだことも、社長夫人や社長令嬢まで売らなければ賠償費用を賄えないってことも、つまりめぼしい資産はなかったってことの証左になる。

贅沢な暮らしはせず、全力で会社を大きくしようとしていた真面目すぎる社長——そんな父親の血を引き、薰陶を受けて、美柚子も真面目すぎる美少女になったのだろう。

「大変だったんだなあ、美柚子……」

しみじみと呟きながら僕は己のペニスを握り、啜り泣いている裸の美少女に向けてシコシコシコシコしごき始めた。

なんて細い肩だろう、なんてしなやかな背筋だろう——しっとり輝く長い黒髪も綺麗だし、透き通りそうなくらい白い柔肌も綺麗だ。あんまり大きくない尻も、決して貧弱なわけではない。若々しく引き締まっているから小さく見えるだけで、肉づきはほどよく、揉めばきつと健康的な弾力を愉しめる。

経緯はどうあれ、コレは僕のものだ。

白く細く華奢な美柚子をどんな風に扱っても、どんな風に辱めても、万が一やりすぎて死なせてしまっても、だれからも文句を言われないのだ。

——いや、経緯も結構重要だ。

淫靡な生活とは無縁だった、真面目で健気な御令嬢。

哀れな奴隷たちが性欲処理用愛玩動物としてどのように犯され、辱められ、虐められているのか、ほとんど知らなかった聖少女。

そんな美柚子が、僕の命令ならなんでも聞く。

嫌悪に顔を歪めつつ、恥辱に涙しながらも、奴隷ならかくあるべしという信念に基づいて一生懸命努力してくれる——。

「み、み……美柚子おおっ！」

「……あっ!!」

名前を呼ばれて振り返った美少女が、僕がしていることに気づいて息を呑んだ。反射的に逃げようとするので、「待て!」と鋭く命じる。

「そ、そのまま……そのまま、動くな！」

「う……く……」

「オスワリの姿勢に戻れ、いや、背はまっすぐに伸ばせ。頭の天辺てっぺんにぶっかけてやる……ほら、早く座り直せ。顔にかけられたいのか?」

強張るペニスをしごきながら凄むと、美柚子は悔しそうに唇を噛み、おずおずと座り直した。曲げた膝を開き、外を向いた脚の間にお尻を落として、細い背をまっすぐに伸ばす。顎を引き、可愛い旋毛を天井に向けて——。

やっぱり、僕の命令ならなんでも聞くのだ。

これからなにをされるのか分かってているだろうに、決して「イヤ」と言わないのだ。

「い、いい仔だ、美柚子……お前はきつと、いい奴隷になる！ 御褒美に、この綺麗な髪にぶっかけてやる、僕の匂いを染み着かせてやる！」

大人しく真面目な優等生美少女は顔もスタイルも僕好みだが、なんといつても美しいのはこの黒髪だ。長く艶やかな、しつとりと輝くしなやかな髪——これを穢したくて穢したくてたまらなかつた。オチンチンに巻きつけてシコシコするのもいいけど、まずはぶっかけからだ！

（そのあとで、亀頭を顔に擦りつけて……イヤがる口にも擦りつけて、柔らかな唇を蹂躪してやる！ オッパイに擦りつけるのもいいな。乳首に鈴口を押し立てたりしたら、きつと気持ちいいだろうなあ……！）

なんてことを考えながら——びゅくっ！ びゅくくっ！

念願の髪射。

淫棒を震わせて迸った白濁液が、美柚子の可愛い旋毛にべちゃっつ！ ねちゃっつ！ と粘着いた。

「……ッ!?」

生温かくおぞましい感触に、裸の美少女の細い肩がビクッと強張る。華奢な二の腕が震

たぶん——美柚子は僕に対し、申し訳なく思っているはずだ。自分の躰がなっていないばかりに僕が恥を掻いたと、真面目な優等生らしく己を責めるはず。

それが、黒田先生からもらった助言の核心。

美柚子は基本的に優しく、そのうえ呆れるほどの頑張り屋なので、上手い具合に負い目を感じさせれば自分で勝手に仕上がっていくはずだ。また、優れた手本を見せれば上達速度も速まるはず——というわけで、今日の会合になったわけ。

「本当に見学だけでいいのか？ どちらか貸してやるぞ」

「そうですか？ んじゃあ……香苗をお借りします」

これもまた、予定通り。

四つん這いになった香苗のうしろに跪き、小さな美尻に左手を乗せる。温かく柔らかな尻房を押さえつつ、右手で尻尾を掴み、ゆっくり引く。

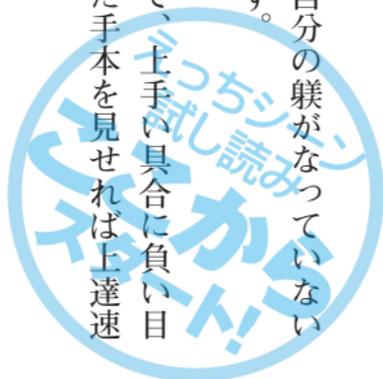
「く……あ、ううっ！」

——ぬぼんっ！

紅い粘膜を捲り返してヌルツと抜け出すアナルプラグ。巨大なドンダリののような形をしたそれを、傍らで息を呑んでいる美柚子に差し出す。

「こ、こんなに、太いのが……」

腸液に濡れたゴム製玩具を仰向けた掌に受けた美柚子は、柔らかな頬を赤らめて絶句。



怯えた瞳をチラ、チラ、と動かして、単一電池ほどもありそうなプラグとぼつかり開いた香苗の排泄孔を何度も何度も見比べる。

「えへへ……すごい？ 香苗、すごい？」

「う、うん……すごい……」

「あはっ！ やったっ！ 美柚子ちゃんに褒められちゃった！ お勉強では敵わないけど、エッチなことなら香苗のほうが上だね！」

肛悦の予感に昂奮しているのか、香苗が上擦った声で早口に言う。気のせいか、視界の端に映る美柚子の顔が、わずかに険しくなったような――。

香苗をライバル視してくれるならありがたい、と思いつつ、僕は滾るペニスを振り勃て、真っ赤な亀頭を香苗の尻穴に押しつけた。

ぬちゃっつと粘着する柔らかな粘膜。

白く輝く裸の腰を掴み、ゆっくりりと圧力を高めていくと――。

「ん……あふ……く、ううっ！」

小さな手で芝生を掻き穿った香苗が呻き、腸液にぬめる排泄器官に僕のペニスが入り込んでいく。亀頭の先端が埋もれ、すぐにカリ首までがしつかりとはまり込み――半ばまでねじ込めば熱くヌルヌルとした粘膜がしきりに波打ち、鋼のように強張った淫茎をリズムカルに揉み始める。白い背を震わせた香苗が「ふあ……ふあ……」と上擦った息を吐くた

び、心地よい締めつけが強まって奥へ奥へ吸い込まれていく。

「よく見ておけ、藤沢。これが賢い仔犬というものだ」

そういう黒田先生は、膝立ちになった裸の様子先生にペニスをムチュムチュしゃぶらせている。黒光りする淫棒は大きく開いた美女の口にすっぽりと包み隠され、剛毛の茂みから伸び出した根元部分しか見えていない。

「お前たち奴隷の肉穴は、チンポを挿入^いれるために在る。オマ○コはもちろん、口でも尻穴でも男を悦ばせられなければ、いい奴隷とは言えない」

「……」

目の前で始まった淫戯に意識をすっかり占拠されてしまったのか、黒田先生に話しかけられても無反応な美柚子。オロオロと揺れる黒目がちな瞳は、僕のペニスを呑み込んだ香苗の尻穴と黒田先生のオチンチンを咥え込んだ様子先生の口元を往き来し——手の中にある太いプラグを無意識に握り締め、薄い乳房にグリッグリツと押しつけている。

「まあ、美柚子がいくら優等生でもすぐには無理ですよ。そ、そんなことより……く、おとおつ!? 香苗のケツマ○コ、また一段と気持ちよくなりましたね！」

「そりゃあそうだ。毎日毎日違う御主人様に躑けられるんだからな。チンポの悦ばせ方を完全にマスターしている。ケツマ○コだけなら、本物の奴隷にも負けないだろう」

得意気な黒田先生の声を聞きながら、僕はゆっくり腰を退く。

ぐ……ぬぬ、じゅぷちゅつ!

淫棒に絡みついていた香苗の排泄粘膜が淫らかな音を立てながら滑り、肛門から掻き出されてあられもなく捲れ返った。傍らに膝を突いた美柚子が目を丸くして息を呑み、

「ん、あ、あああ——っ!」

再びペニスをねじ込んでいけば、四つん這いになった香苗が薄い背を反らせながら喜びの鳴き声を張り上げる。

「み……美柚子ちゃ、あ、ああんツ! 見てる? ねえ、見てるう?」

見られながらのエッチが大好きというのも、賢い仔犬の条件だ。

「か、香苗のウンチの穴には、は、葉山くんの、おちんち、ンうううっ! ね? ね? 見てる? 見て、見て……お願い、見てええっ!」

「見てる、ちゃんと見てる、から……」

応える美柚子の声が、らしくもなく上擦っている。

生まれて初めて目の当たりにしたアナルセックスに、度胆を抜かれているらしい。

(す、すっごく真剣な顔で見てるな……)

クラスメイトだったときには視界にも入らなかつたであろう僕を、僕のオチンチンを、真面目な優等生美少女が生唾を呑み込みながら見つめている。陽光を浴びて艶やかに輝く長い黒髪、芝生の緑に生える白い肌、ほのかに紅潮した柔らかな頬、妖しい光を帯び始め

た円つぶらな瞳——若々しく健康的な美少女の裸体に昂りながら、僕は少しずつ腰の動きを強めていく。美柚子によく見てもらえるように、大きく強く、徐々に徐々に速く——。

「えへ……えへへ……すごい？ ねえ、すごい？」

——と、美柚子に話し続ける香苗。

普段のクラスではあまり目立っていない香苗にしても、美柚子は眩しくて遠い存在だったのかもしれない。遙か彼方にいて燦然と輝いていた優等生美少女が、自分と同じ場所まで堕ちてきて、しかも自分がしていることに目を奪われている——。

肛悦以上に、美柚子に見られていることが嬉しいのだろう。

「香苗、ウンチの穴でちゃんとできる、んだ、よおおつ！ ンあ、ふう、あああ……ウンチの穴で、き、気持ちよくなっちゃう、ン、ンん……だよおおつ！」

舌っ足らずな声で何度も何度も、得意気に鳴く。

すっかり仕上がっている香苗の尻穴は、次第に速度を速める僕の淫棒をしっかりと受け止めてくれる。どんなに荒々しく動いても——と言うより激しく動けば動くほど、温かな蜂蜜のような腸液をじゅわつじゅわつと滲ませながら妖しい蠢きを強め、龟头やカリ首、淫茎をいやらしくしゃぶりまくってくれ。

強力な吸引感が尿道を逆流、ペニスの芯まで気持ちよくなる。精巢に溜まっている精液が、無理矢理吸い出されてしまいうさだ。

「く、お……おおっ！」

こらえきれずに吼えた僕は、香苗の腰を掴み直し、腰の動きを強めた。

「あうっ!? あ、あう、あううっ!？」

香苗の声も裏返る。

四つん這いになった小さな身体が泳ぐようにくねり、突っ張っていた細腕がカクンと折れて、チクチクする芝生に薄い乳房や勃起乳首を擦りつけ始める。

「イクぞ、香苗……もうイクぞっ! か、香苗の中に……中に、中に……ッ!」

「だ、出して……出してお願い、中に中に……か、香苗の中に、いっぱいいっぱい……ビュクッ! ビュクッ! してえ——っ!」

——びゅくっ! びゅくくっ!

煮え滾った精液が勃起ペニスを震わせながら、熱い直腸の中へ勢いよく噴出。

「はにやうっ!? あ、う……く、ううっ!」

射精を感じたら締める、という条件反射を形成したのか、色を失うほど伸びきっていた香苗の尻穴がキュウツと締まる。射精中の淫棒がさらに強く搾られ、いつそう淫らにしやぶりまくられた。

* * *

その、帰り道——。

「あ……そ、そういう、こと……」

持ち前の頭のよさで僕の言いたいことを理解した美柚子が、急に醒め、再び恨めしげな目になって、僕を斜めに睨みつける。その視線の意外なほどの熱さに、僕はニンマリ微笑んでしまう。

「へえ？　なんだよ美柚子、本当にオマ○コしたかったのか？　処女なのに、優等生のクセに、どんだけいやらしいんだ？」

「……ッ！　は、葉山くんの……バカッ！　意地悪ッ！」

「そうだよ、僕は意地悪だよ。美柚子を虐めるのが楽しくて楽しくて仕方ないんだ。だからもう、分かるよね？　オマ○コはオアズケだ。残念だったね、美柚子」

「く……うううっ！」

いまにも掴み掛かってきそうな美柚子の小さな頭を、平手で軽くペシリ。

「美柚子がバカなことを言うからだぞ？　僕が好きなのは処女なのにすっごく淫乱で、人に見られながらのエッチが大好きっていう、ド変態の優等生なんだよ。祥子先生も香苗も、まして圭子も関係ない。美柚子が好きだ。美柚子だから好きだ。本当を言えば、僕だって早く美柚子とオマ○コしたいんだよ」

「……なのにしてくれないのは、私が処女だから？」

「そう。処女なのにウンチの穴で感じてしまうド変態優等生ってのを造りたいんだ」

「私の気持ちは？ 奴隷だから考えなくていいって言うの？」

むくれて拗ねて、僕を斜めに睨む美柚子。なんだか美柚子らしくない、子供っぽい表情だけれど、これこそが本当の美柚子なのだろう。

「ちゃあんと考えてるさ。僕は美柚子の御主人様だからね。想像してごらん、クラスメイトの前でお尻の穴を広げている自分を。そこに僕のオチンチンを受け容れる自分を。穢いはずの肛門で感じてしまい、処女マ○コをジユクジユクに濡らしてしまおう自分を——」

「……あ、う……うううっ！ 意地悪、意地悪ううっ！」

たちまち赤らむ顔を両手で覆い、イヤイヤと首を振る美柚子。

「どう？ いまここで初体験したい？ 処女なのにアナルセックスでグチュグチュチュになっちゃうエッチなエッチなオマ○コを、みんなに見られるのはイヤ？」

「わ、分かったわよっ！ もう言わなくていいから！」

「そう？ だったら四つん這いになって。遅くても今年の文化祭には間に合わせたいからね。ここで肛門特訓しよう」

そう言っただけで促すと、美柚子はなおもプリプリとむくれたまま、しかし素直に四つん這いになった。小振りな美尻を僕に向け、ふ、はあ……と息を吐いて括約筋を弛める。

そこに突き出たアナルプラグの端を摘み、もう片方の手で美柚子の尻房を押さえ——。

ぬ、ぬぬ。

コブコブとしたゴム製玩具を半ばほどまでゆっくり抜き出し、軽く捻りを加えながら、すぐにまた深く深く挿し込んでいく。

「ン、あ……ふあ……」

玩具の動きに合わせて上擦った吐息をこぼし、細い手足を突っ張った美柚子は、もうすっかり落ち着いた様子。期待していた以上、妄想していた以上に尻穴で感じてくれるので、僕は毎日がとても楽しい。

そうそう、忘れないうちにもうひとつ。

「美柚子の家では、奴隷をみんなメイド待遇してたんだよね」

抜け出てくるアナルプラグに絡みつき、ぬらっと捲れ返る美少女の紅い排泄粘膜を見つめながら、僕は静かに語りかける。

「だったら知らないのも無理はないけど、奴隷っていうのは本当にいろいろあるんだよ」

「ン……あ、うう？　な、なんの、話……ふう、ああ、ンうう……」

「個人が愛玩用に飼う仔犬、虐めて遊ぶ専用のサンドバッグ、母乳を搾り取るための乳牝、荷車なんかを牽かせるための仔馬——」

「だ、だから、なんの話……なのっ!？」

淫具に穿られた排泄孔が気持ちよく、頭が回らなくなりつつあるのか、美柚子が上擦った声で叫んだ。細い腰がくねり、赤らむオマ○コからトロリトロリと甘酸っぱい蜜が垂れ

る。下を向いているから確認できないけれど、おそらく胸先では乳首が勃起し、秘裂の縁では小さな小さなクリトリスが健気に痼り勃っているだろう。

「奴隷の頂点なんてないんだって話」

「ン？ あ……？ な、なに？ なにを言ってる……」

「最高級のリングと最高級のミカンがあつたとして、上なのはどっち？ 短距離走の世界チャンピオンとマラソンの世界チャンピオンの、どっちが本当のチャンピオン？」

「そ、それは……ああ、うう……ふあ、ああ……」

——コブコブとしたアナルプラグの動きに合わせてヌツポヌツポと鳴る菊膜が、震えながら窄まり、弛み、また窄まる。日々賢くなる優等生の排泄孔が、ペニス代わりの淫具をいやらしくしゃぶり始めたのだ。

「美柚子は乳牝じゃないんだから、様子先生みたいにならなくてもいいんだよ。それに、分類としては仔犬になるんだろうけど、世界で一番素敵な仔犬でなくても、僕は全然構わないんだよ」

「ン、あ……うう、く……ううッ！」

「美柚子は美柚子らしくあつてくれれば、それでいいんだ。分かるかな、美柚子？」

「わ……分からないっ！ 分からないわッ！ 葉山くんの言うこと、全然分からない！」
うーん、これだけ言っても分かってくれないのか——と苦笑しながら思ったけど、そう

じゃなかった。

「お、お尻……お尻が……お尻が、気持ちよくつてっ！　いまはダメ、ダメなの、ダメええつつ！　頭、変、変なの……なに言ってるか、全然、分から……ないいいっ！」

「……ああ、そういうこと」

いつの間にか美柚子は、肛悦の虜になっていたらしい。

仕方ないのでプラグを引き抜き、

「ソ、あ……？」

どうしてやめるの、と言いたげに振り返る美柚子に改めて話しかける。

「僕は乳牝が欲しいわけじゃないから、美柚子は祥子先生みたいにじゃなくていい。もちろん、圭子みたいな特訓も必要ない。仔犬コンテストつてのもあるにはあるけど、それに美柚子を出すつもりもない。美柚子が美柚子らしくあれば、僕はそれでいいんだ。奴隷の頂点になんて立たなくていいんだよ」

「……わ、分かった……分かったからあ……そんなのどうでもいい、から……い、意地悪、しない、でえ……ッ！」

涙をこぼし、尻を左右に振って、駄々っ子のように身体を揺らす美柚子。

たぶん分かっていないけど、すっかり発情しているから、一度イかせないとなにを言っても耳に入らないだろう。

苦笑した僕はプラグを美柚子の尻穴に戻そうとして——やめた。

代わりに、紅く捲れてぬらぬらと輝く美少女の排泄孔を、ジッと見つめる。

最初のころに比べたら、ずいぶん柔らかさそうさだ。これならひよつとして、入るかも——。

「は、早くう……早くううんっ！」

甘え声で誘っている美少女の、細い腰をガチッと掴む。

焦る指先でベルトを弛め、勃起ペニスを振り出して、

「ん……あっ!? あ、や……ま、待って、待って待って、葉山くんっ！」

「やだ。待たない」

「ま、まだダメ、まだダメだつてば……あっ!? く……ンラッ！」

弛んだ排泄孔からはみ出して捲れ返り、紅く咲きこぼれている柔らかな直腸粘膜に龟头を押し当て、力任せにグリッとねじ込む。

蕩けかけていた括約筋がハツとしたように強張り、締まって、肉のクサビを拒もうとするが——ぬ、ぬぬ、ぐぬぬっ!

「く、ひ、うう……ッ!? は、入って、くる……ああ、あああ、は、葉山くんの、お、オチンチンが……ああ、ああ……は、はい、るううっ！」

温かな腸液のぬめりに乗って、僕の淫棒が美柚子の尻穴へ少しずつ少しずつ潜り込んでいく。思った以上にキツく、強烈に締めつけられるから、一気になってわけにはいかないけ

れど——。

「くふっ!? あ、うう……くう、うう……う、ぐううう……ッ!」

地面を掻き雀つた美柚子が苦しそうに呻くたび、一センチ、また一センチと深度を増す。滾る亀頭が波打つ直腸粘膜にヌチャツと包まれ、揉みまくられて——震える括約筋がエラを越え、カリ首を越え、鋼のように強張った淫茎をギュチ、ギュチ、と締めつけ始める。

「く、お、おおっ! き、気持ち、イイイッ!」

呻く美少女の細い腰をガツチリ掴み、思わず僕は吼えてしまった。

フェラなんかより遥かに強烈な、痺れるほどの吸引感。

敏感な亀頭に密着したヌルヌルは唇の裏側の柔らかな粘膜に似ているが、あれよりもずっと滑らかでしなやかで肉厚で、蕩けるほどに気持ちイイ。ビクツと腰が動いた途端、その快感が爆発的に膨れ上がり——。

「あっ!? あう、ああっ!? やだ、ダメ……痛い痛い、お尻裂ける、裂けちゃう裂けちゃうッ! くッ!? あ……くヒッ!? う、ううう……ッ!」

悲鳴を上げる美柚子を無視し、激しく腰を振つてしまう。

本能に命じられるまま動くたび熱く潤んだ直腸粘膜に亀頭が擦れ、擦れて、杭のように太い快感が背を駆け上り脳天を突き抜けていく。

「や、め、てえ……葉山くん、ダメ、ダメ……ダメええっ!」

「ご……ごめん美柚子、もう止まれないっ！　そ、それに……ほら。周りを見てごらん」
 「うう？　あ……あ、あああっ!？」

僕もついさつき気がついたのだけれど、周囲にはいつの間にか人垣ができていた。

虫取りに来た子供たち、その保護者、僕らの同級生や上級生、下級生——知ってるオジサンオバサンも、知らないオジサンオバサンもいる。他所の学園の制服を着た、僕らと同じくらいの歳頃の男子や女子もいる。裸で四つん這いになった賢そうな美女・美少女も、ヒィ、ヒィ、と喘いでいる美柚子をジッと見ている。

奴隷とのエッチなんて別に珍しくもないだろうに、みんながみんな鼻の下を伸ばしてニヤニヤしているのは、美柚子の泣き顔が可愛いからだろう。

「お姉ちゃん、お尻でするのは初めてなの？　その割にはしっっかり入ってるね」

「苦しそうに鳴いていても、乳首はちゃんと立っているわね」

「当たり前でしょ。お尻の穴があんなに伸びているんだもの、ブリッコぶっているだけで本当はちゃんと感じているのよ」

「頑張れ、あと少しだ！　ちゃんとケツの穴を締めるんだぞっ！」

「兄ちゃんも頑張れっ！　そら、そら！　もつと激しく突いてあげてっ！」
 たくさんの声に煽られた美柚子は耳の先まで真っ赤になり、絶句。

地面に肘を突き、仰向けた掌に紅い顔を押しつけて、

「いや……いや、いやああっ！」

羞恥の悲鳴を張り上げる。

見られることを想像するのと実際に見られるのでは、恥ずかしさのレベルが違うのだらう。けれど、恥ずかしいことが大好きだっていう変態性癖に変わりはなく——。

ぎゅ——ちゅっ！

ただでさえキツかった尻穴がいつそう強く締めまり、半ばまで呑み込まれた淫棒に熱く滑らかな直腸粘膜が絡みついてくる。

「お、お、おとお——ッ！」

再び吼えた僕は、ラストスパート。

震える美柚子の腰を掴み直し、波打つ排泄粘膜を抉り、抉り、抉り——。

「はうっ!? あ、あううっ!? く、あ……あう、あう、ああううっ！」

雪の結晶のように儂げな、大人しくて控え目な優等生美少女の哀れな鳴き声が、次第に切迫して上擦り、切れ切れになる。

「だ、ダメ……ダメなのダメなの、本当にダメええっ！」

「なにがダメなの、美柚子？ 美柚子はもう、葉山くんの奴隷でしょ？ だったら、なにをされても悦ばなきゃ」

「ち……違うの、違うの違うの、そうじゃ、なくってえ……ッ！」

両手で顔を覆った美柚子の鳴き声が、甘やかな響きを帯び始める。涙混じりに湿っぽくなり、だんだん呂律が回らなくなつて、

「お、お尻……お尻、気持ちイイのおおっ！ 痛いけど、痛いけろおおっ！ お、お尻痺れて……美柚子は美柚子は、お尻れ変になる、変なコ、な、によおお——ッ！」

——びくんっ！ びくんっ！

地面に突つ伏したまま、白い背を痙攣的に震わせる裸の美柚子。いつそう強く尻穴が締まり、熱い腸液にぬめる粘膜が捻れて震えて、淫棒が一際強く強く搾り上げられ——。

——びゅくっ！ どびゅっ！ びゅくくっ！

勃起ペニスを震わせつつ、勢いよく迸る精液。

「くはッ!? あ、ああ……」

口以外の穴で初めて中出しを体験した美柚子は、弾けるように顔を上げ、薄く白い背をしなやかに反り返らせて、細い肩を震わせながら——次第にうっとりとして恍惚の笑みに。

「あはっ!? やだ美柚子ったら、本当にウンチの穴で感じてるの!?!」

「このお姉ちゃん、すっごく綺麗なのに、どうしようもない変態なんだねえ……」

周囲から浴びせられる嘲笑も、倒錯性癖に目覚めた優等生美少女にとってはこのうえない御褒美。

いい加減なことを言いながら、僕はさらに体重をかける。

「痛い痛い、痛いわよおっ！」

「でも、入る……ほ、ほら、入っていくよ！」

「んくっ!? く……んぎ、ひ、ひいい……ッ！」

ぐち、ぐちち——ぐぬちゅっ!

雄々しく張り出したエラが膣口を越え、亀頭全体が熱い粘膜に包み込まれた。激痛に痙攣する壺口に、キリキリと締め上げられるカリ首。

「くお、お、おおお——ッ！」

濃密な愛液に濡れた処女膣膜の、期待以上の吸着感に、ペニスが蕩けてしまいそうだと頭の中が真っ白になり、割れを忘れて腰をガンガン振りそうになる——が、危ういところで押し留めた。

僕が気持ちイイのは当然として、問題は美柚子だ。せっかくここまで順調に馴致してきたのに、処女喪失の痛みで全部失ってしまったらもつたいなさすぎる。

「ほ、ほら。ちゃんと入っただろ？ 大丈夫大丈夫、痛くないって」

「嘘お、嘘おっ！」

涙声で語りながらもなぜか、美柚子は僕を拒んでいなかった。

それどころか、マングリ返しのような体勢になっていた脚を僕の首に絡め、泣き濡れた



顔に引き寄せようとする。

「な……なに？」

「キス、して……頑張れって、キスして……そしたら私、頑張れ、る……」

「……ど、どうしたんだ、美柚子？ 急に、そんな……」

「いいからキス、してよおっ！」

破瓜の激痛の最中でもなお発情したままなのか、泣き濡れた優等生美少女が駄々っ子のように喚く。なんだかすぐく可愛い。いつも以上に愛おしい。

一段とドキドキした僕は、首に絡まっている細い脚を左右に開いてやりながら前のめりになり、真っ赤に染まった美柚子の頬に喘ぐ唇を押しつけた。塩辛い涙を吸い、舐め取って、薄い脛や鼻の頭にもキス。同時に腰をグイッと動かす。

——ぐぬちゅっ！

「ンっ!? く、きゅうう……ッ！」

熱い愛液に濡れた処女膣膜を掻き分けて、勃起ペニス突き進む。

ヒクつく壺口が淫茎の半ばまで達し、ただでさえキツイ締めつけがいつそう強まる。

「く、う、うう……は、入って、るう……わ、私の中に、す、すつごく、大きな……お、大きくて硬い、モノが……あッ!? ふあッ!? くあ、あ、ああ、ううう……ッ！」

淫棒をぬつつちよりと包み込む、茹だったゼリーのように温かくてヌルヌルとした感触が

気持ちよすぎて、僕の腰が勝手に前後し始めた。美柚子を痛がらせないよう、必死に抑えているつもりなのに、クイッククイックと動く。ぐぬちゅ、ぐぬちゅ、と掻き回してしまう。いったん動き出したら、もう止まれない。

(い、いけない……美柚子を痛がらせたなら、元も子もない……ッ！)

頭の隅では思うものの動けば動くほど気持ちよくなり、さらに深く、さらに強く、僕の意味を追い越してどんどんどん加速してしまう。

「ンぎっ!? ふ、くうう……ッ! こ……これ……これが、せ、つくす……うう、くう、うう……こ、これ……これ……なんだか、変ううっ!」

胸の下、顔を歪めた美少女が掠れた声で鳴いた。

くねる細腕が僕の肩を虚しく押し、僕の背を弱々しく掻き巻く。

「ご、ごめん美柚子、すぐに、すぐに終わる、から……痛くても、もう少し我慢……!」

「い、痛く……ないっ! もう痛くないっ!」

「え?」

驚いて顔を離したのに、すぐに美柚子の手に捕まり、引き戻されてしまった。

「なんだかすごい、あ、熱い波が、すぐく、すぐくて……お願い、ギユツとしてっ! でないと私、私……ンあ……あ、うう……浮く、浮く浮く……浮いて浮いて、飛ぶ……飛ぶ、飛ぶ、飛ぶううっ!」

——ぎゅうつ！

僕の腰に美柚子の脚が絡みつき、ものすごい力で締めつけられた。細い腕は首に絡み、息が詰まりそうなくらい強く強く抱き締められる。おかけでペニスグチュツと前進、敏感な龟头が柔らかかな肉膜に触れた。狭く深い膣穴の最奥部、子宮口の傍に到達したのだ。

「きゅっ!? ううう……んっ！」

一段高い快感に打ち抜かれたらしく、美柚子が涙をこぼしながら淫らな笑みを深めた。仰向けに横たわった細い身体が微かに震え、しっとり汗ばんだ柔肌がほんのり桃色に上気して——ぎゅち、ぎゅち、と僕の淫棒に絡みついた熱い粘膜がぎこちなく蠕動。

溢れるほどに膣液を滲ませていた処女膣穴は、いつの間にか一丁前の性感帯に成熟していたらしい。僕の勃起ペニスがグチグチと押し潰した細かな細かな膣襞に、快感の火花が次々と弾け、破瓜の痛みを掻き消してしまったようだ。

「はう、あ、うう……葉山くん、葉山くん、葉山くうんっ！　お願い……お願いいっ！　ギユツとして、ギユツとしてよおっ！」

淫らに裏返った鳴き声に合わせ、ギユチツ、ギユチツと美柚子の膣穴が締まる。初体験したばかりだから動き自体はぎこちないが、密着感は素晴らしい。

「み、美柚、子お……ッ！」

吼えた僕も美柚子の薄い背に腕を回し、無我夢中で腰を振った。

くぼちゅっ！ くぼちゅっ！

熱い潤みに深々と潜り込んだ淫棒が、破瓜の血をこぼす処女膣穴を捲り返していやらしい音を掻き鳴らす。

「あっ!? う、ああっ!? 奥、奥……奥、にいいっ！ お腹の奥に、か、硬いのが……当たってる、当たってる、当たって、当たって……ああ、ああ、ああああっ！」

上擦る声で鳴きながら、悩ましげに眉を歪めて細い腰をくねらせる美柚子。

狭くてきつい処女膣穴がますます強く緊縮し、僕の淫棒を強く強くしゃぶり立てる。強烈というか猛烈というか、喻えようのない吸引感。

尿道の奥に溜まった精液が、吸い出されてしまいそうだ。

「な、中に……中に出すよ、美柚子おっ！」

宣言した僕は、高まる射精欲求に衝き動かされるまま荒々しく腰を振る。

喘ぐ美少女の膣奥を突いて突いて突いて、あの瞬間をまっすぐに目指す。

「ふにやつ!? あにや……にやああっ!?」

感極まった美柚子の声が、仔犬から仔猫に変化した。

すでに軽い絶頂に達したのか、うっすらと汗ばんで桜色に火照る裸体がぶる、びくくと小刻みに痙攣。

「ら、らえ……らえ、らえらえらえっ!? も、もうらめ、らめらめ、なんからめええ！」

呂律の回らなくなった舌で何事かを口走りながら、両手で顔を覆う美柚子。

手首を掴んで開き、真上から見下ろせば——トロトロに蕩けた熱い瞳が、僕の顔を縫る目つきで見つめてくる。

「や……らああつ！　みないれ、みないれええつ！　いま、みゆこ、へんなかおになつてるううつ！」

「へ、変じゃない、すつごく可愛いよ」

「やら、やら……へんらよ、へん……へんうううつ！」

——泣いているのに笑つてる。

変と言えば確かに変だけれど、このうえなく可愛い。

煮えたように熱い処女膣穴もギョツチギョツチと締めつけてくるし、床に拡がつて輝く長い黒髪からは甘酸っぱい牝香が立ち上つてくるし——。

「み……美柚子おおつ！」

ペニスの芯に精液が沸騰、高まる射精欲求に衝き動かされるまま腰を振る僕。

荒々しさを増した淫棒が、熱くぬめって柔らかな優等生美少女の膣奥を、突いて突いて抉り、突いて突いてまた抉る。

沸騰した高波が、深々と繋がったふたりの間を何度も何度も往き来しているようだ。美柚子の悦びが僕の快感になり、僕の昂奮が美柚子の淫悦に変化する。

「にやうあつ!! はにや……あにやあああつ!!」

さらなる絶頂に追い詰められた美柚子が、舌つ足らずな声で鳴いた。細い腰をくねらせ、涙と涎をこぼして長い黒髪を揺らし、乱し――。

「も、もう少し、もう少しから……あ、あと少し……らからっ!」

朦朧としながら叫ぶ僕も、あまりの快感に呂律が回らなくなっている。甘酸っぱい汗に濡れた美少女の柔肌に頬摺りし、喘ぐ唇を夢中で吸って、とにかく腰を振りまくる。

「あ、あ……あうあああッ!」

一際高い声で美柚子が鳴き、僕の首にギュウツとしがみついてきた。

互いの腰の角度が微妙に変わり、ペニスがもう一段深く潜る。

滾る亀頭が優等生美少女の膣奥に触れ、愛液に濡れた肉膜越しに子宮をグリッグリッと間断なく抉る。

「い……いい、イクイクイク、イク、イク、イクううっ! わ、私イッちやう、イッちやうイッちやう……は、葉山くん、葉山くん、葉山くううう――ンッ!」

――びくんっ! びくんっ!

いつそう鋭く締まる、熱く潤んだ処女膣穴。

「な、中に……中に出す、よおおっ!」

しなやかに反り返った美少女の細い腰を抱き締め、下腹に力を込めて、びゅくくっ!

びゅくくっ！ と射精する僕。

尿道を駆け抜けていく精液は、いつもの数倍もありそうだ。

ドッドドッドと淫茎全体が震え、気が遠くなりそうなくらい気持ちいい。

そのうえ、

(くっ!? お、おお……ッ!? こ、これは……ッ!?)

白濁液を进らせる悦びに、淫棒をしゃぶられる快感が加わった。

どびゅっどびゅっどびゅっどと精液を噴いている最中のペニスが、振れながら緊縮する美柚子の膣洞に搾り立てられているのだ。

ねっとりと熱い粘膜が、震える肉茎に絡み、蠢き、キュウツと締まる。

そのたびに鈴口に凄烈なまでの吸引感が炸裂し、尿道の中に残る最後の一滴まで——いや、僕の魂までが吸い出されていくような、えもいわれぬ開放感。

わざとやっているのではなく、美柚子の奥底にある牝の本能の仕業だろう。

「きゅ……ふ、うううん……」

伸びやかな手足をプルプル震わせ、膣穴を無意識に締め続ける優等生美少女。

(こ、こんなに気持ちいい、なら……もっと早く、犯るんだったなあ……)

そんなことを蕩けた頭で思いながら——僕は情けないことに、美柚子と繋がったまま失神してしまった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>